



Title	ジュネーブWHO本部：顧みられない熱帯病（ブルーリ潰瘍）部署でのボランティア報告
Author(s)	村瀬, 千晶
Citation	目で見えるWHO. 2020, 71, p. 14-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86551
rights	
Note	

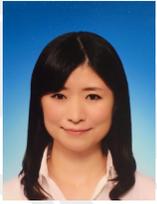
The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ジュネーブ WHO本部

顧みられない熱帯病(ブルーリ潰瘍)部署でのボランティア報告



名古屋大学大学院医学系研究科 皮膚科学分野 病院助教

村瀬 千晶

医学部医学科卒業後、トヨタ記念病院で初期臨床研修を行い、名古屋大学皮膚科に入局。医学博士号を取得後、WHO本部での短期留学を経て現職に至る。

はじめに

～ブルーリ潰瘍と NTDs ～

私は皮膚科入局後、国内発症のブルーリ潰瘍症例の治療に携わったことをきっかけに、2015年以降、WHO本部でのブルーリ潰瘍の専門家会議に定期的に参加するようになりました。ブルーリ潰瘍は、顧みられない熱帯病(Neglected Tropical Diseases: NTDs)に分類される熱帯皮膚病で、抗酸菌の一種である *Mycobacterium (M).ulcerans* の感染により皮膚に潰瘍を起こします。 *M. ulcerans* が出すマイコラクトンという脂質毒素により、宿主が痛みを感じない間に潰瘍病変が緩徐に進行し、四肢の拘縮や切断などの障害を負うリスクとなります。蔓延国であるガーナを含むアフリカ諸国を中心に、年間約4000-5000例(約半数が15歳未満)の発症を認めますが、日本国内でも認知度は低いものの、年間約数例の発症を認めています。

NTDsは約150の熱帯の国や地域を中心に蔓延している寄生虫、細菌、ウイルス等の感染症のことで、現在、ブルーリ潰瘍以外にもリーシュマニア症やデング熱、狂犬病など、20の疾患があります。世界中で14億人以上がこれらの感染症で健康な生活を脅かされています。NTDsの分野は現在患者数に比して、世界的に専門家の数が不足していると言われています。研究も十分に進んでおらず未解明な部分も多く、治療にアクセスできずに苦しむ方も多いと知り、大学院博士課程卒業を機に、NTDsについてさら

に詳しく学ぶために今回の留学を決意しました。

配属先部署

希望通り、スイス・ジュネーブのWHO本部における、NTDsの部署に8～9月の6週間、配属されました。本部署は、多種多様なNTDsをカバーしており、私が専門とするブルーリ潰瘍は、ガーナ出身のMedical OfficerであるAsiedu Kingsley先生が担当されており、私のスーパーバイザーはKingsley先生でした。

主な仕事・役割

～NTDsに対する取り組み～

私と与えられた仕事は主に、①Community levelでのskin NTDs教育用資料の作成、②アフリカ諸国でも広く普及している、スマートフォンなどを用いた遠隔診療(Digital Health)を進めていく上での、皮膚科医としての専門的な意見・介入、③熱帯病に関する大型国際研究費の応募、という3点でした。

①に関しては、現地で多様な皮膚NTDsの各疾患の診療に携わる各国の医療スタッフの方々からご提供いただいた臨床写真などをもとに、資料の作成を行いました。これまで、District levelでの教育用資料として、詳しい文章で皮膚NTDsの各疾患の説明が記載された資料はありましたが、Community levelにおいて、文字が読めない患者さんやご家族への説明にも使えるような資料は存在しなかったため、典型的な臨床経過が一

目でわかる写真を4コマ漫画形式で掲載した資料を作成することになりました。NTDs蔓延国において医療を行う上で、まず住民の方々に対し、どのような皮膚の状態になったら医療機関を受診すべきで、治療しない場合はどのような転機を辿るかということを教育し、医療を受けるタイミングと重要性を教育することは非常に重要です。早期に医療機関を受診し、コンプライアンス良く治療を行うことが、多くの疾患で後遺症を残さず治療を成功する上で大切なポイントになりますが、そのためにはこのような教育が欠かせません。この資料作成の仕事は、ジュネーブでの6週間の短い期間では終わらなかったため、残りは日本に持ち帰り、帰国後も引き続きKingsley先生と連絡を取りつつ、進めることになりました。

②に関しては、WHO本部において、皮膚疾患に限らずDigital Healthのプロジェクトを進めている担当者の方とミーティングを行い、画像での遠隔診療が期待されている皮膚疾患における実用化への議論をしました。アクセスのしやすさという観点から、特別な機器を準備しなくても、例えば多くの人が所有しているスマートフォンと、普段広く使用されている連絡用アプリなどを利用した遠隔診療の実現の可能性について、メリットと、想定される様々な問題点を挙げて議論し、実用化への課題を検討しました。

③に関しては、日本の研究機関が主体となって応募する国際研究費で、「ブルーリ潰瘍における臨床現場即時検査



スーパーバイザーの Kingsley 先生と



NTDs の部署でランチタイムのパーティー

「Point of Care Testing: POCT」の開発」のテーマで、応募書類の作成・申請を行いました。ちょうど私がジュネーブに滞在した6週間の間に、一次選考の締め切り (Intent to Apply Submission) と、二次選考の締め切り (Full Proposal Submission) の日程が重なったため、私の留学期間の最初から最後までかけて取り組んだ仕事となりました。

他、ブルーリ潰瘍蔓延国における様々な研究調査の打ち合わせも進めました。WHO 本部での6週間が終わった翌週は、NTDs の部署のうち多くのメンバーと一緒にリバプールに移動し “NTDs NGO Network (NNN) Conference 2019” という国際会議に参加しました。

学んだこと・身についたこと

国際研究費応募の仕事を通して、共同研究機関を探す段階から始まり、英語での応募書類作成及び申請、計7つ(4か国)に及ぶ共同研究機関との各国の時差を計算した連絡のやり取りなど、国際的に協力して一つの仕事を進めることの難しさを経験することができました。語学力だけではなくコミュニケーション能力や、研究分野における専門知識など、実際に仕事を進めていく上で必要となる課題を知ることができました。

感想・印象に残ったこと

普段、日本では臨床医として働いているため、週に4日は朝から外来診療を行い、外来終了後、医局に戻って様々な

研究や書類作業などの仕事を行っています。日本でブルーリ潰瘍などに関する仕事に少しずつ携わらせていただいていたのですが、臨床が中心の生活で、やはり目の前の仕事で頭がいっぱいになってしまふ毎日でした。今回、初めて臨床から離れて NTDs の仕事に集中して広い視野で取り組み、このような医療への関わり方もできるのだと実感できたことは、自分にとって大きな収穫でした。

私が配属された NTDs の部署は、皆気さくに話しかけて下さったり、食事に誘って下さったりと、暖かくて相談しやすい雰囲気の、素晴らしい環境でした。6週間過ごす中で、色々困りごと(パソコンが壊れるなど)が有りましたが、そのたびに優しく助けてくださいました。ジュネーブにはレマン湖という大きな湖があり、仕事終わりに部署のメンバーでレマン湖のほとりで美味しいチーズやキッシュを持ち寄って、お誕生日会をしたのはとても楽しかったです。

これから WHO インターン / ボランティアを希望する人へ

私は博士号を取得後、半年ほどで渡航でしたので、インターンではなくボランティアの枠で採用されました。インターン制度については最近少し変更があり、インターンは従来のカフェテリアでのランチ割引の他にも、一部金銭的な補助が出るようになったそうです。物価が高いジュネーブでの生活は誰にとっても大変ですが、特に途上国からのインターンの

参加を応援する意味もあるとのことでした。

WHO 本部でのインターンは特に夏は人気が高く、採用までの道のりが長いこともあるかもしれません。ボランティアは、WHO からの金銭的な補助はありませんが、インターンよりも自由度が高く、実際の業務内容としては個人の能力に合わせて仕事を与えられるため、WHO で働くという目的を果たす為には、大変良い選択肢になると感じました。職場は皆一緒なので、同時期に働いている各国からのインターンの方々とも交流があり、毎日彼らと一緒にランチを食べて喋ることは、一番の息抜きでした。特に仲良くなったインターンの方とは、WHO の建物の中を探検したり、週末一緒にピクニックをしたりと、楽しい思い出が沢山できました。

おわりに

最後に、現地で私を受け入れてくださった WHO 本部の NTDs の部署の皆様、WHO 本部の結核の部署にご勤務されており、今回の渡航に関して様々なアドバイスをくださった錦織信幸先生、普段からの活動に加え、今回の渡航を支えてくださった名古屋大学の皆様、渡航に際しましてご支援いただきました公益社団法人 日本 WHO 協会、公益財団法人 村田学術振興財団、公益財団法人 豊秋奨学会、公益財団法人 大山健康財団の皆様、その他関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。